『ボヴァリー夫人』における3つの<時>

佐々木　順　子

I

フロベールの<不動性>については動作の停止に関する研究がほとんどである。(たとえば『感情教育』の不動性に関する多数の研究もほとんどはこの類であろう。)

『ボヴァリー夫人』に見られる30余あるimmobileという言葉もすべて動作の停止を表わしている。

たとえば,

ils [Léon et Emma] restèrent assis l'un en face de l'autre [...] immobiles, sans parler[1].

「彼らーレオンとエンマーはお互い向き合って一言も話さず，みじろぎもしないですわっていた。」

これは確かに緊張した場面である。そしてこれは動作の一瞬の停止であると同時に Genette がこの「沈黙」について≪le récit semble se taire et se figer sous ce que Sartre appellera *le grand regard pétrifiant des choses*[2]≫と述べているように，récit の停止でもある。

それでは<時間>の immobilité についてはどのようになっているであろうか。

G. Poulet はラシーヌの時間について①temps discontinu ②temps continu ③temps intemporel という3つの段階があると述べている[3]が，『ボヴァリー夫人』の<時間>の観念の中にも3つの異なる要素が含まれているように思われる。つまり①temps linéaire(temps は直線的なものだが，他のものと区別するため敢えてこの修飾語を用いる) ②temps récurrent(規則正しく繰り返す時間) ③temps immobile の3つである。

それではこの3つの<時>にはそれぞれどのような特徴が見られるだろうか。①と②は流れ去る時間であり，③はそれに対立する durée のない完全な circularité

の世界である。

Ⅱ

V. Brombertがその *The Novels of Flaubert* の中で≪This double perspective, dramatic and narrative, constitutes the basic Flaubertian unit[(4)]≫と述べているように，narrationとdescriptionという区別が通説と言ってよいであろう。

これに対しG. Genetteはプルーストの作品に関して≪alternance, celle de l'itératif et du singulatif[(5)]≫すなわち動作の回数という観点から論じている。

ここでフロベールのこの作品をitératifとsinguratifという点ー動作の回数による分類ーに注目して，temps linéaireとtemps récurrentとの関係を検討してみたいと思う。

『ボヴァリー夫人』における出来事（événements）を一度だけのものと，繰り返される行為に区別して，時間との関係を調べてみよう。

①一度だけ行われる行為とtemps linéaireの関係——別表(1)参照。

＜日付け＞はフロベールのこの作品において極めてあいまいであり，シャルルの父が退役した1812年からオメが国王に請願するー従って1848年以前ー≪Il adressa même au souverain une pétition[(6)]≫ーという大まかな年代しかわからないのであるが，一度だけの出来事には別表のようにほとんどune nuit, un matin, un jourなどが示されているし，le lendemain, 2 jours aprèsなどの＜日付け＞により示されている2つ（3つ）の事件はほとんど何らかの因果関係を示しているということができる。

従ってévénementsの流れ，つまりrécitと＜直線的な時間＞の流れは平行しているということができるだろう。

②それではsouventにより示されるévénementsとtemps récurrentの関係はどうであろうか。

別表(2)の＜村人の生活＞と＜エンマの生活＞を見てみよう。

＜村人の生活＞は大きく分けて，＜日＞周期のもの，＜週＞周期のもの，＜年＞周期のものに分けられるように思われる。これは完全に＜ temps récurrent ＞の世界である。

一方 souvent に代表される，繰り返される événements ―たとえばエンマは「しばしば」デッサンをし[7]，「しばしば」舞踏会からの帰りに拾ったたばこ入れをながめる[8]など―は，エンマの朝シャルルを見送り[9]，午後は２階の部屋でひとり[10]，夕方は夕食の用意とだんらん[11]という日課に対して，例外を示しているか，あるいは単なる動作の繰り返し (répétition) を示しているので，＜規則正しい時間＞(temps récurrent)とは無関係といえるのではないだろうか。

今までは動作と時間の観点からこの２つの＜時間＞をながめてみたのであるが，Thèmes の観点から検討してみると，どのようになるであろうか。

① temps linéaire にしばしば登場するテーマは fuite（流れ去ること）と discontinuité（不連続性）である。

この作品で＜川＞は流れ去る＜時＞のイメージを表している。

エンマとレオンが乳母を訪ねて帰る途中，２人は自分たちの恋愛に酔っているのであるが，＜川＞に沿ってヨンヴィルに帰ってくる[12]，またレオンがパリへ去った後も ≪La rivière coulait toujours[13]≫，ロドルフとの恋愛においても＜川＞への言及が見られる。≪Ils entendaient derrière eux la rivière qui coulait[14]≫，≪comme la rivière qui coulait[15]≫。エンマが死んだ後も≪On entendait le gros murmure de la rivière qui coulait[16]≫。

このように＜川＞は人の生死にかかわりなく，常に流れ去る＜時＞を表しているように思われる。

ところで前述した一度だけの événements にも fuite のテーマは見られる。日がさ (ombrelle) の場面で，≪les gouttes d'eau, une à une tomber sur la moire tendue[17]≫，ルオーが自分の妻の思い出について ≪ça a coulé brin à brin, miette à miette[18]≫と語るのはその例である。

また，とりかえしのつかない過去に対する悲哀の感情については，シャルルとエンマの結婚式に関してルオーおやじが自分たちの結婚式を思い出す場面，≪Comme

c'était vieux tout cela ! [...] Il se sentit triste comme une maison démeublée[19] ≫ , レオンがヨンヴィルを去った後のエンマの夢想, ≪ C'était cette rêverie que l'on a sur ce qui ne reviendra plus[20] ≫, ルオーおやじの手紙を読んでエンマは実家のことを思い出す, ≪ Comme il y avait longtemps qu'elle n'était plus auprès de lui [...] Quel bonheur dans ce temps-là ! [...] Il n'en restait plus maintenant ![21] ≫ 。シャルルの父の死は母ボヴァリーにとって ≪ Les pires jours d'autrefois lui réapparaissaient enviables[22] ≫ , 息子のボヴァリーにとっては ≪ il s'étonnait de sentir tant d'affection pour cet homme qu'il avait cru jusqu'alors n'aimer que très médiocrement[23] ≫, 修道院のそばを通りかかったエンマの感慨は ≪ Quel calme dans ce temps-là ! comme elle enviait les ineffables sentiments d'amour qu'elle tâchait, d'après des livres, de se figurer ![24] ≫ またエンマの死に遭遇してシャルルは ≪ Il fut longtemps à se rappeler ainsi toutes les félicités disparues, ses attitudes, ses gestes, le timbre de sa voix. Après un désespoir, il en venait un autre, et toujours, intarissablement, comme les flots d'une marée qui déborde[25]. ≫ などの例が挙げられよう。

もちろん souvenirs はすべて悲しみをもたらすものではなく，例えば駈け落ちを前にしてエンマたちは過去をふりかえるが，それは甘美な感情に満ちている。≪ La tendresse des anciens jours leur revenait au cœur, abondante et silencieuse [···] avec autant de mollesse qu'en apportait le parfum des seringas[26]. ≫ また思い出はすべて過ぎ去り，跡形も残さないのではなく，ルオーおやじが言うように ≪ c'est descendu, je veux dire, car il vous reste toujours quelque chose au fond, [...] un poids, là, sur la poitrine ![27] ≫ , またロドルフの思い出は ≪ Quant au souvenir de Rodolphe, elle l'avait descendu tout au fond de son cœur; et il restait là[28] ≫ 。これはフロベール自身の考え方でもある。

一方 discontinuité (「過去と現在との意識面での一心理的な一断絶」の意) については，舞踏会でエンマが窓ガラスの割れる音にうしろをふりかえり，のぞき込んでいる人々を見て自分の過去を思い出すが，≪ aux fulgurations de l'heure présente, sa vie passée, si nette jusqu'alors, s'évanouissait tout entière, et elle

doutait presque de l'avoir vécue[29] ≫。また自分の家に帰り，≪ Qui donc écartait, à tant de distance, le matin d'avant-hier et le soir d'aujourd'hui ? Son voyage à la Vaubyessard avait fait un trou dans sa vie[30] ≫。トストからヨンヴィルへの引越しは彼女にとって ≪ inauguration d'une phase nouvelle[31] ≫をもたらすと期待し，ロドルフとのランデヴーから帰ってきたエンマは鏡を見て ≪ Quelque chose de subtil épandu sur sa personne la transfigurait[32] ≫などの例が挙げられる。このことに関してはフロベール自身，≪ Mais quelque chose de plus farce encore, c'est l'abîme qui nous sépare de nous-mêmes[33] ≫と述べているところである。

②他方 temps récurrent に見られるテーマは enfermé と continuité（心理的な連続性）であろう。

例えば ≪ C'était comme une poussière d'or qui sablait tout du long le petit sentier de sa vie[34] ≫，≪ Il connaissait l'existence humaine tout du long, et il s'y attablait sur les deux coudes avec sérénité[35] ≫—シャルルの場合—とか，≪ Elles [les mêmes journées] allaient [・・・] se suivre ainsi à la file[36] ≫—エンマの場合—などはこの例であろう。

しかしながら，シャルルにとってそれが<安堵>の気持なのに比べて，エンマやレオンにとってそれは ≪ accablement[37] ≫であり，≪ chagrin[38] ≫をひきおこすものでしかない。

一方 enfermé のテーマは主にエンマに関するものである。≪ L'avenir était un corridor tout noir, et qui avait au fond sa porte bien fermée[39] ≫とか，≪ elle remontait, fermait la porte, étalait les charbons[40] ≫ あるいは ≪ elle le [perruquier de Tostes] voyait toujours là, comme une sentinelle en faction[41] ≫，≪ Est-ce que cette misère durerait toujours? est-ce qu'elle n'en sortirait pas ?[42] ≫などはその例であろう。

エンマにとってこれは出口のないものであり，≪ ennui [・・・] lourd[43] ≫をもたらすものにすぎない。

Ⅲ

それでは③のtemps immobileについて検討してみよう。

エンマのボヴァリスムは有名であるが，彼女の恋愛観にはどのような要素が含まれているであろうか。

次の3つの要素が考えられよう。

① lieu （場所についてのボヴァリスム）

② mots （ことばについてのボヴァリスム）

③ temps（時間についてのボヴァリスム）

それぞれの要素について検討してみよう。

1) エンマは恋愛に適した土地があると考えている。

代表的な例は≪Pour en [la lune de miel] goûter la douceur, il eût fallu, sans doute, s'en aller vers ces pays à noms sonores[44]≫，あるいは，≪Ne fallait-il pas à l'amour, comme aux plantes indiennes, des terrains préparés, une température particulière ?[45]≫などがあるが，他にも10数箇所指摘できる。

この考えは，ロドルフと駈け落ちを試みようとし－≪Nous irions vivre ailleurs[46]≫－あるいは借金の申し込みにレオンの所へエンマはやってくるが，部屋に通そうとするレオンに対してエンマが≪Oh ! non, là-bas, chez nous[47]≫という短いことばの中にも表現されている。

2) エンマは恋愛に適した言葉があると考えている。

まずエンマ自身が気どった言い方をしている。

小犬に≪Allons, baisez maîtresse[48]≫，あるいはロドルフに対して≪Un amour comme le nôtre devrait s'avouer à la face du ciel ![49]≫，一方レオンはエンマを≪dame≫と考える。

そして，舞踏会での人々の会話に聞き耳をたて[50]，レオンとの会話[51]，ロドルフとの農業祭での会話[52]，破局を招く手紙[53]に至るまですべて<恋愛にふさわしい言葉>(fatalité[54]，fleurs, vers, lune, étoiles など[55])で色どられ，逆にシャル

ルの会話は ≪ plate comme un trottoir de rue[56] ≫となってしまうのである。

3) そしてエンマは恋愛には特有の時間 (temps sans durée) があると考えている。

a) シャルルとの結婚生活においてエンマを失望させるもの—それは régularité であり，習慣となってしまったamourである。

Ses [Charles] expansions étaient devenues régulières; il l'embrassait à de certaines heures. C'était une habitude parmi les autres[57].

b) またロドルフとの恋愛において，駈け落ちの前数日間エンマは夢想にふけるのであるが，≪ Cependant, sur l'immensité de cet avenir qu'elle se faisait apparaître, rien de particulier ne surgissait ; les jours, tous magnifiques, *se ressemblaient comme des flots*[58] ≫（イタリック筆者）という一節にはこの < temps immobile >が表明されているのではないだろうか。

4) こうした恋愛におけると同時に，フロベールのこの作品ではエンマの修道院生活もこの<時>を表しているといえよう。

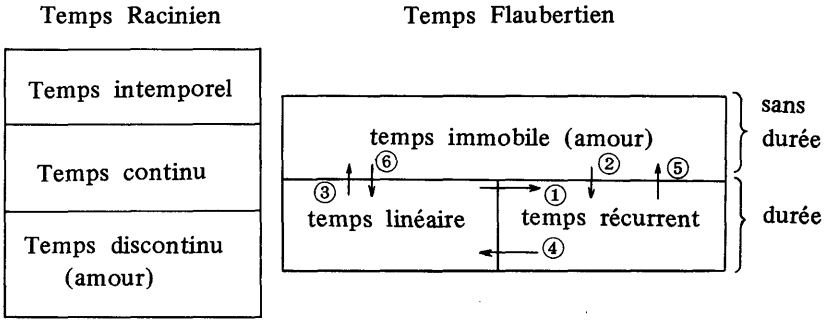
かべに囲まれ，俗世界の物音 ≪ au *bruit lointain* de quelque fiacre attardé qui roulait encore sur les boulevards[59] ≫（イタリック筆者）がほとんど聞こえないこの隔絶された世界には，俗世間とは別の<時間>があるとエンマが考えるのも納得できよう。

後に述べるように，エンマは母の死の悲しみがうすれていくことに関して，≪ Elle s'en ennuya, n'en voulut point convenir, continua par habitude, ensuite par vanité, et fut enfin surprise de se sentir apaisée[60] ≫のように深いおどろきを味わい，これが彼女に修道院を去らせる原因の一つになったのではないだろうか。

Ⅳ

それではこの3つの<時>は構造的にどのようにかかわっているだろうか。

前述のラシーヌの<時>と対照させて図式化してみると，次のようになるだろう。



<現実>と<非現実>の区別では，<現実>における２つの<時>が生かされないし，また temps immobile には<現実>の修道院生活も含まれると考えたい。

以下この一方から他方への移行の特徴について順次述べてみよう。

1) temps linéaire から temps récurrent へ

例えば舞踏会の思い出について，≪ Ah! il y a huit jours [・・・] il y a quinze hours [・・・] il y a trois semaines, j'y étais! Et *peu à peu* les physionomies se confondirent dans sa mémoire(61)≫（イタリック筆者），あるいはレオンがヨンヴィルを去った後，エンマがレオンについて思い出す場面で，≪ Cependant les flammes s'apaisèrent, soit que la provision d'elle-même s'épuisât, ou que l'entassement fût trop comsidérable. L'amour, *peu à peu*, s'éteignit par l'absence, le regret s'étouffa sous l'*habitude*(62)≫（イタリック筆者）などに見られるように，この移行は漸進的に行われている。

2) temps immobile から temps récurrent へ

この例はかなり多い。

ⓐたとえばすでに引用した ≪ Ses expansions étaient devenues *régulières;* il

l'embrassait à de certaines heures. C'était une *habitude* parmi les autres[63] ≫ (イタリック筆者)

ⓑあるいは ≪ si bien que leur grand amour, où elle vivait plongée, parut se diminuer sous elle, comme l'eau d'un fleuvre qui s'absorberait dans son lit, et elle aperçut la vase[64] ≫ 。この文章においては descente のテーマが見られる。

ⓒあるいは ≪ cela se balançait à l'horizon, infini, harmonieux, bleuâtre et couvert de soleil. Mais l'enfant se mettait à tousser dans son berceau[65] ≫。

この1), 2) ともに場所的移動はみられない。

3) temps linéaire からtemps immobile へ

代表的なのはロドルフとの逢引き，シャルルとの結婚，聖体拝領などであり，これらはすべて ascension のテーマが見られる。

une immensité bleuâtre l'entourait, les sommets du sentiment étincelaient sous sa pensée, et l'existence ordinaire n'apparaissait qu'au loin, *tout en bas,* dans l'ombre, entre les intervalles de ces *hauteurs*[66].

elle possédait enfin cette passion merveilleuse qui jusqu'alors s'était tenue comme un grand oiseau au plumage rose *planant* dans la splendeur des *ciels* poétiques[67]

il lui sembla que son être, *montant* vers Dieu[68](イタリック筆者)

4) temps récurrent からtemps linéaire へ

エンマがヴォービエッサールの舞踏会の通知を受けとる際，≪ Mais, vers la fin

de septembre, quelque chose d'expraordinaire *tomba* dans sa vie[69] ≫（イタリック筆者）と述べられているように，この移行は突然に行われる例がほとんどである。

エンマにとってこの移行は願望の対象になっている。

Les autres existences, si plates qu'elles fussent, avaient du moins la chance d'un événement. Une aventure amenait parfois des péripéties à l'infini, et le décor changeait. Mais, pour elle, rien n'arrivait[70]

レオンにとっては魅惑とおそれの対象になっている。

Cependant, la perspective d'une situation nouvelle l'*effrayait* autant qu'elle le *séduisait*[71]（イタリック筆者）

そしてこの移行は場所的移動を伴うことが多い。
舞踏会は代表的なこの移行の例であるが，エンマたちはヴォービエッサールの城へと出かけていくし，ヨンヴィルへの引越しはエンマにとって≪comme l'inauguration d'une phase nouvelle[72]≫である。

5) temps immobile から temps linéaire へ

例えば ≪elle vivait comme perdue dans la dégustation anticipée de son bonheur prochain[73]≫ が挙げられる。

6) temps immobile から temps linéaire へ

前述した母の死に関してエンマが味わう≪déception≫が代表的な例である。
また駈け落ちが不首尾に終わった時，エンマはtemps immobile からtemps linéaire へつきおとされ(chute)，病気になってしまう。
レオンと毎週木曜日ルアンで逢引きしているエンマが，ルルーに対する借金のために（この金貸し男にとってはまさに「時は金なり」であろう）ついに死に至らし

められるのもこの移行を表わしているのではないだろうか。そしてエンマはこの temps immobile が全くの虚構であったことを思い知らされることになる。

2), 5) の移行がゆるやかであるのに比べて 3) は「至福 (félicité)」であり，6) は激しい失望というように，その移行は急激かつ強烈であるといえよう。

V

フロベールは『ボヴァリー夫人』における時間について，このように表現しているのであるが，彼はこの3つの<時>を同時に体得したわけではなく，順次にかくとくしたといえるのではないだろうか。

1) temps linéaire

フロベールの<過ぎ去る時間>，<流れ去り，定まるところのない時間>というイメージは，ロマン主義者たちの<時間のアトミスム>[74]とは異なり，彼らの点に対して線を表わしているといえるだろう。この考え方がよく表われているのは，ルイーズ・コレとの文通 (1846－49年，フロベールが近東旅行に出かけるまでの時期) においてである。

Depuis que nous nous sommes dit que nous nous aimions, tu te demandes d'où vient ma réserve à ajouter ≪ pour toujours. ≫ Pourquoi ? C'est que je devine l'avenir, moi.[75].

Va, je t'aurai bien aimée, avant que je ne t'aime plus[76]

Je me dis toujours [...] qu'un jour viendra où nous nous séparerons[77]

フロベールが言うように≪ antithèse[78] ≫のせいだとしても，知り合って1週間にもならない恋人の手紙にしては妙であろう。

この頃フロベールは父や妹の死によって<流れ去る時間>というものを体験した

ことも原因なのではないだろうか。

≪ tout s'en va ≫という言葉がくりかえし現われるのも，この頃である。

Comme tout s'en va ! comme tout s'en va !(79)

Les nœuds les plus solidement faits se dénouent d'eux-mêmes, parce que la corde s'use. Tout s'en va, tout passe; l'eau coule et le cœur oublie(80).

Comme tout se dégarnit, comme tout s'en va, quel dégel continu que la vie !(81)

Je vis seul, très seul, de plus en plus seul. Mes parents sont morts. Mes amis me quittent ou changent(82).

2) temps récurrent

1842～43年のパリへ法律の勉強に出かけた際の ennui は『書簡集』や『感情教育』に顕著である。

Voici quelle est ma vie. Je me lève à huit heures, je vais au cours, je rentre et je déjeune d'une manière très frugale; je travaille jesqu'à cinq heures du soir, heure à laquelle je vais dîner; avant six heures je suis de retour dans ma chambre, où je m'y divertis jusqu'à minuit ou une heure du matin. A peine si une fois par semaine je descends de l'autre côté de l'eau pour aller voir nos amis(83).

そしてこのような生活を続けた結果が次のような手紙となって現われる。

Je suis tellement agacé qu'il faut que je me dilate un peu en vous écrivant. Je prends jour définitivement vendredi prochain. Je veux en finir le plus tôt possible parce que *ça ne peut pas durer plus longtemps comme ça. Je*

finirais par tomber dans un état d'idiotisme ou de fureur. [...] Je crois que je serais même content si j'étais refusé, tant *la vie que je mène depus six semaines me pèse sur les épaules*(84). （イタリック筆者）

フロベールはこの<たいくつな時間>についても十分経験しているはずである。

3) temps immobile

フロベールが durée のない完全な circularité という時間の観念をいつ体得したかは疑問のあるところである。

近東旅行後再び文通を始めたルィーズに対して ≪il n'y a de continuellement bon que l'habitude d'un travail entêté(85)≫ と「習慣」の効用を説くのは象徴的である。

これはエンマ・ボヴァリーにとっての < habitude > とは異なり，≪Le mouvement est arrêté(86)≫ の中でのhabitude ―フロベールは ≪comme un marais dormant(87)≫ と形容している―であり， durée のない circularité の世界を模倣しているように思われる。

Ce que je fais aujour'hui, je le ferai demain, je l'ai fait hier. J'ai été le même homme il y a dix ans(88)

la mienne [ma vie] est un lac, une mare stagnante, que rien ne remue et où rien n'apparaît. Chaque jour ressemble à la veille: je puis dire ce que je ferai dans un mois, dans un an(89).

これらはその例として挙げられるのではないだろうか。

また≪il faut que je sois dans une immobilité complète d'existence pour pouvoir écrire(90)≫におけるimmobilité は，動作ではなく，時間の<不動性>を意味しているのではないだろうか。

この circularité sans durée という<時間>の観念は，フロベールの近東旅行によって強く印象づけられたと思われる。

フロベールは「聖書」の世界がそのまま息づいているのを目のあたりにしたのである。

C'était bien là ce vieil Orient[91]

La Bible est ici une peinture de mœurs contemporaines[92]

そしてこの<時間>の観念がフロベールにおいて完成するのは，自らを< mystique >にたとえるようになった時である。

Je suis mystique au fond et je ne crois à rien[93].

Je viens de passer une bonne semaine seul comme un ermite et tranquille comme un dieu[94].

それまではこの < habitude > に従って生活する自分を < ours blanc > と形容している[95]。

クロワッセの隠者 (ermite de Croisset) はつまりこのimmobilitéの中で生活しているということではないだろうか。

フロベールは『ボヴァリー夫人』においては主に「恋愛」の中に存在しているこの<不動性>について言及しているのであるが，後には宗教的な時間に次第にひかれていったと思われる。

註

1) Gustave Flaubert, *Madame Bovary,* Classiques Garnier, 1971, p. 303
2) Gérard Genette, *Figures I,* Editions du Seuil, 1966, p. 236
3) Georges Poulet, *Etudes sur le temps humain,* Librairie Plon 1952, t. 1, p. 160
4) V. Brombert, *The Novels of Flaubert,* Princeton, New Jersey, Princeton University Press, 1966, p. 44

5) G. Genette, *Figures III,* Editions du Seuil, 1972, p. 170
6) *Op. cit.,* p. 353
7) *Ibid.,* p. 42
8) *Ibid.,* p. 58
9) *Ibid.,* p. 35
10) *Ibid.,* p. 61, 62
11) *Ibid.,* p. 62
12) *Ibid.,* p. 97
13) *Ibid.,* p. 126
14) *Ibid.,* p. 173
15) *Ibid.,* p. 204
16) *Ibid.,* p. 336
17) *Ibid.,* p. 19
18) *Ibid.,* p. 22
19) *Ibid.,* p. 32
20) *Ibid.,* p. 126
21) *Ibid.,* p. 177
22) *Ibid.,* p. 258
23) *Ibid.*
24) *Ibid.,* p. 289
25) *Ibid.,* p. 340
26) *Ibid.,* p. 204
27) *Ibid.,* p. 22
28) *Ibid.,* p. 220
29) *Ibid.,* p. 53
30) *Ibid.,* p. 58
31) *Ibid.,* p. 88
32) *Ibid.,* p. 167
33) *Oeuvres Complètes,* Club de l'honnête homme, 1974, t. 13, p. 396
34) *Op. cit.,* p. 62
35) *Ibid.,* p. 90
36) *Ibid.,* p. 65
37) *Ibid.,* p. 120
38) *Ibid.,* p. 128

39) *Ibid.*, p. 65

40) *Ibid.*, p. 66

41) *Ibid.*

42) *Ibid.*, p. 69

43) *Ibid.*, p. 66

44) *Ibid.*, p. 41

45) *Ibid.*, p. 61

46) *Ibid.*, p. 192

47) *Ibid.*, p. 303

48) *Ibid.*, p. 46

49) *Ibid.*, p. 198

50) *Ibid.*, p. 53

51) *Ibid.*, p. 84-86

52) *Ibid.*, p. 146-153

53) *Ibid.*, p. 207-209

54) *Ibid.*, p. 208

55) *Ibid.*, p. 288

56) *Ibid.*, p. 42

57) *Ibid.*, p. 45

58) *Ibid.*, p. 201

59) *Ibid.*, p. 40

60) *Ibid.*

61) *Ibid.*, p. 58

62) *Ibid.*, p. 127

63) *Ibid.*, p. 45

64) *Ibid.*, p. 175

65) *Ibid.*, p. 201　　この一節に関しては G. Genette, ≪Silences de Flaubert≫ dans *Figures I* p. 224 参照

66) *Ibid.*, p. 167

67) *Ibid.*, p. 41

68) *Ibid.*, p. 218

69) *Ibid.*, p. 47

70) *Ibid.*, p. 65

71) *Ibid.*, p. 121

72) *Ibid.*, p. 88

73) *Ibid.*, p. 199

74) ≪ Benjamin Constant≫ dans *Etudes sur le temps humain* t. 1 p. 259-285
真木悠介 『時間の比較社会学』 岩波書店，1981，p. 186−211参照

75) *Oeuvres Complètes*, t. 12 p. 478 (1846年8月6日付)

76) *Ibid.*, p. 479 （同日付）

77) *Ibid.*, p. 483 (1846年8月8日付)

78) *Ibid.*, p. 478

79) *Ibid.*, p. 475 (1846年6月4日 E. シュバリエ宛）

80) *Ibid.*, p. 511 (1846年9月2日 L. コレ宛）

81) *Ibid.*, p. 586 (1847年2月15日 E. シュバリエ宛）

82) *Ibid.*, p. 472 (1846年5月 M. デュ・カン宛）

83) *Ibid.*, p. 404 (1842年11月16日 妹宛）

84) *Ibid.*, p. 407 (1842年12月 妹宛）

85) *Ibid.*, t. 13 p. 142 (1851年 7月26日 L. コレ宛）

86) *Ibid.*, p. 385 (1853年8月14日 L. コレ宛）

87) *Ibid.* p. 382 （同日付）

88) *Ibid.* p. 165 (1852年 2月1日 L. コレ宛）

89) *Ibid.*, t. 12 p. 502 (1846年8月26日 L. コレ宛）

90) *Ibid.*, t. 13 p. 181 (1852年4月15日 L. コレ宛）

91) *Ibid.*, t. 12 p. 666 (1850年1月5日 母宛）

92) *Ibid.*, p. 669 (1850年1月15日 J. クロケ医師宛）

93) *Ibid.*, t. 13 p. 192 (1852年5月8-9日 L. コレ宛）

94) *Ibid.*, p. 493 (1854年8月17日 L.ブイエ宛）

95) *Ibid.*, t. 12 p. 459, p. 463, p. 503 など

<別表1>

événement	date	date	événement
① ルオーおやじのけが	Une nuit (13-17)	le lendemain (18)	シャルルのベルトー訪問
② 日がさ	Une fois, par un temps de dégel (18-19)		
③ 公証人逃亡	au commencement du printemps (20)	Huit jours après (21) le lendemain (21)	エロイーズ喀血 エロイーズの死
④ ルオーのシャルル訪問	Un matin (21)		
⑤ シャルルのベルトー訪問	un jour vers 3 heures (23)		
⑥ 結婚の申し込み	A l'époque de la S. M. (25-26)	le lendemain (26)	シャルル，エンマを訪問
⑦ 結婚式	(春)	le lendemain (31) 2 jours après la noce (31)	別人のよう 出発
⑧ 舞踏会	vers la fin de septembre, un mercredi (47-56)	le lendemain (57)	庭の散歩，思い出
⑨ ルオーの娘夫婦訪問	Vers la fin de février (68)		
⑩ 花束の焼却	un jour (70)		
⑪ 引越し	au mois de mars (70)	le lendemain (88)	レオンと再会
⑫ 出産	un dimanche (91)		命名
⑬ 乳母に会いにいく	Un jour (93-98)	(même jour)	レオンを同伴
⑭ ボヴァリー夫人のレオンへのプレゼント	Un soir (102)		

⑮ 観葉植物			
⑯ 工場見学	un dimanche de février (103-105)	le lendemain (105)	ルルーの訪問
⑰ エンマ，子供をひきとる			
⑱ 教会へ	au commencement d'avril, un soir (112-118)	(même jour)	子供のけが
⑲ レオン，ヨンヴィルを去る	acacia の季節 (121-126)	le lendemain (126)	思い出
⑳ 母ボヴァリー去る	un mercredi (130-135)	(même jour)	ロドルフ登場
㉑ 農業祭	(夏)	2 jours après (157)	新聞へ報告 (オメ)
㉒ ロドルフと再会	Un soir (159)	(même jour)	乗馬のすすめ
㉓ 森でのランデヴー	aux premiers jours d'octobre (161-167)	la journée du lendemain (167)	逢引き
㉔ ロドルフに会いに行く	Un matin (168)		
㉕ ビネに会う	Un matin (169-172)	le lendemain (172)	逢引きの相談
㉖ ルオーの手紙	C'était l'époque où . . . (175)		びっこの手術
㉗ ロドルフへプレゼント	Saint-Pierre の頃	le lendemain (194) 3 jours après (195)	ルルーの請求書 借金返済
㉘ adultère 決定的	un jour (197)		
㉙ 駈落ちを拒否する手紙	un lundi (197-214)	le lendemain (209)	手紙にエンマ卒倒する

㉚ 病気小康状態	Vers le milieu d'octobre, un jour (215)		
㉛ 聖体拝領	un jour (218-219)		
㉜ 庭の模様替え	au commencement du printemps (222)		
㉝ ルアンの劇場見物	un jour (223)	le lendemain (237) le lendemain (244)	レオン・エンマをくどく ルアンの教会にて
㉞ シャルルの父の死	(même jour) (255)	le lendemain (257) Le jour d'après (258)	母ボヴァリーの到着 { 喪 { ルルー登場
㉟ 委任状	un jour (260)	dès le lendemain (261) 3 jours (261-263)	エンマ，ルアンへ lune de miel
㊱ レオン，ヨンヴィルへ	un samedi matin (264)	Ce fut vers cette époque . . . (265)	ピアノのレッスンに毎週ルアンへ行く許し
㊲ ピアノの領収書	un soir (276)	dès le vendredi suivant (276)	シャルル，領収書をブーツの底にみつける
㊳ ルルーに見られる	un jour (277)	3 jours après (277)	請求書
㊴ 借用書をシャルルが見る	un jeudi (279)	le lendemain (280) dès le lendemain (281) le jeudi d'après (281)	母ボヴァリー到着 借用書の作りかえ 母ボヴァリー去る レオンと話す

㊵ エンマ，ルアンから帰らない	un soir (282)		
㊶ オメ，ルアンへ	un jeudi (284-288)		
㊷ エンマ，修道院のそばを通りかかる。	un jour (289-290)		
㊸ 執達吏の登場	une fois (290)	le lendemain (290) dès le soir (293)	拒絶証書を受けとる 相続の清算について照会の手紙を送る
㊹ 質入れ	un jour (295)		
㊺ 仮面舞踏会	le jour de la mi-carême (297-298)		
㊻ 競売の通知	le lendemain (298)	le lendemain (301) le lendemain dimanche (302)	執達吏，動産を調べる レオンの所へ金策 ロドルフの所へ金策 エンマの死

（なおワク内の数字はガルニエ版『ボヴァリー夫人』のページ数）

<別表２>

村人の生活

周期	<日>	<週>	<年>
①	tous les jours à la même heure ... (66) 村の教師が家のひさしを上げる garde-champêtre が通る	① le dimanche (43) ボヴァリー夫妻，客をむかえる ② le dimanche-vêpres (65, 304)	① A l'époque de la S. M. (25) ② carême (68) ③ comices agricoles (135) ④ S. Pierre (194)
②	soir et matin (66) chevaux de la posteの水浴び	③ le dimanche (102) ビネの日課（ろくろ）	⑤ moments des confitures (251) ⑥ Pâques (221)
③	夕方６時半～８時（100，124） オメ，ボヴァリー家訪問	④ 4 fois par mois (106) ルルー，ルアンヘ	⑦ mi-carême (297)
④	deux fois par jour (99) レオンの通過（事務所への行き帰り）	⑤ marché (130) ⑥ les mercredis (133) オメ，多忙	
⑤	ビネ６時に夕食（77，264） （後５時になる）	⑦ レオン，毎週ルアンヘ（120）	
⑥	Angelus の鐘 (112)		
⑦	Hirondelle (80, 218, 335)		
⑧	子供達の帰校５時頃（218）		
⑨	夕食（97，222）		

（　）内の数字はガルニエ版『ボヴァリー夫人』のページ数